

## 平成26年度 英国野外博物館への現地調査報告 野外博物館の持続的発展を目指して

田 中 裕 二<sup>\*1</sup>

米 山 勇<sup>\*2</sup>

### 目 次

はじめに

1 チルターン野外博物館

2 ウィールド・アンド・ダウンランド野外博物館

3 エイボンクロフト野外博物館

4 セント・ファガンズ国立歴史博物館

おわりに

キーワード 歴史的建造物 野外博物館 保存修復 維持管理 ボランティア  
ファンドレイジング 教育普及

### はじめに

国内の野外博物館をつなぐ組織として全国文化財集落施設協議会があり、江戸東京たてもの園が所属している同協議会では、北は北海道開拓の村から、西は四国民家博物館まで、全国12の公立・私立の野外博物館が規模の如何を問わず、共通課題の解決方法を模索するなど、緩やかなネットワークを構築している。

一方、国外に目を向けるとICOM (国際博物館会議) の傘下である国際委員会のDEM HIST (International Committee for Historic House Museums : 伝統建築物に関する博物館国際委員会)、ICOMと提携関係にあるAEOM (the Association of European Open Air Museum ヨーロッパ野外博物館協議会) と大きく2つの組織がある。ところが、江戸東京たてもの園は、どちらの国際組織にも加入しておらず、海外の野外博物館との連携や共通の問題を議論する国際的なネットワークへの参画が課題となっている。

そこで、江戸東京たてもの園は開園20周年を記念して、海外の野外博物館との連携や今後の博物館のあり方を討議することを視野に入れ、平成25年3月23日、スウェーデンにある野外博物館の雄、スカンセン野外博物館 (Skansen) からCEOのヨン・ブラッドミュール氏 (Jhon Brattmyhr) を、オランダア

<sup>\*1</sup> 東京都江戸東京博物館学芸員

<sup>\*2</sup> 東京都江戸東京博物館研究員

ネム野外博物館 (Nederlands Openlucht Museum) からは館長のピーター・ガイスバーク氏 (Pieter Gijbers) を江戸東京たてももの園に招き、シンポジウム「これからの野外博物館」を開催した。

翌年の平成26年3月27日には、「江戸東京たてももの園30棟完成記念シンポジウム これからの野外博物館Ⅱ」を開催し、北米カナダの野外博物館アッパー・カナダ・ビレッジ (Upper Canada Village) のブルース・ヘンベスト氏 (Bruce Henbest) を、オーストラリアのソブリン・ヒル (Sovereign Hill) からCEOのジェレミー・ジョンソン氏 (Jeremy Johnson) を招き、海外の野外博物館との連携を進めてきた。

さらに平成26年12月、これまで交流のなかった英国の代表的な野外博物館の4施設 (うち3施設はチャリティーと呼ばれる非営利法人が運営する野外博物館と、1施設は国立の野外博物館) とコンタクトを取り、学芸員の田中裕二と研究員の米山勇が訪問し調査を行った。本稿は、この英国の4野外博物館調査によって抽出された日英野外博物館が持つ共通の課題と相違点を記すとともに、今後の野外博物館のあり方を検討するための素材を提示することを目的とした調査報告である。

## 1 チルターン野外博物館 (Chiltern Open Air Museum)

ロンドンのメルリボーン駅から北西に電車で約30分、シャルフォントラティメール駅からバスで15分ほどの場所にあるのがチルターン野外博物館である。ロンドンの中心部より電車で30分ほどと、野外博物館としては比較的恵まれた立地条件とは言え、「博物館」全体で見ればアクセスがよいとは言いがたい。野外博物館は広大な土地を必要とするため、どうしても郊外に設置せざるを得ないという制約があり、日本の代表的な野外博物館である明治村や北海道開拓の村なども、郊外に立地している。物理的に遠いということは来館を阻害する要因のひとつにもなっている。

チルターン地方は、1960から1970年代にかけて急速にロンドン近郊の開発と都市化が進んでいったため、伝統的な建造物が破壊されていった。そこで、建物の保存対象をチルターン地方に限定し、1976年に開園したのがこのチルターン野外博物館である。設立された当初は、とにかく建物を移築保存し、伝統的建造物を破壊から救うことを第一のミッションとして掲げていたが、現在のミッションはやや変わり、家・人・景観を一体として保存し、チルターンの長い歴史を物語ることに重点が置かれている。つまり、建物だけでなく、人、生活、地形、動物、植物といったあらゆる対象を保存しながら「チルターン地方の物語」を紡ぎ、受け継いでいくというユニークなコンセプトを持つに至っているのである。



チルターン野外博物館 茅の葺き替えの様子

2014年度の収入は£531,827（≒9306万円、1£=175円換算）、支出は£531,385（≒9,299万円）、一般の入場料は£9.50（≒1,662円）、4歳から16歳までの子供料金は£6（≒1050円）と日本の公立野外博物館と比べるとやや高めの設定である。

やや高めの入場料設定の理由は、チャリティー（Charity）と呼ばれる英国の非営利法人が運営しており、公的な補助金等を一切受けていないインディペンデント・ミュージアムに分類される博物館だからである。職員数は8人と少なく、ボランティア250人が多くの業務を支える体制になっている。

また、ここではインディペンデント・ミュージアム向けのHLF（Heritage Lottery Fund）や英国のアーツカウンシルといった外部資金で雇われた正職員の他に8人の若いトレーニー（研修生）達が、ボランティアとしっかりした信頼関係を築きながら、日々の博物館活動を支えている。学校団体の受入れを行うエドゥケーターもこのトレーニーが担っているが、助成金には限りがあるため、有期雇用にならざるを得ないという課題もある。日本では考えられないが、建物の修復や、草屋根の刈り取りから葺き替えにいたるまで、基本的にすべてボランティアが関わっていた。

しかし、こうしたボランティアや地域住民が主体的に博物館の運営や設立に関わっている点などに十分に留意しなければならないだろう。チルターン野外博物館に限らず、今回の調査で訪れた4館のうち、3館は独立系博物館、すなわち税金が投入されていない私立の非営利法人なのである。このチャリティーという制度は遡れば英国で400年以上の歴史がある。博物館設立の背景や、ボランティア活動に対する日英の文化的な土壌の違いや非営利法人の比較は別途稿を改めたい。

財政的に税金が投入されていない、つまり公的な補助金を受け取っていないため、先のトレーニー職員の雇用に始まり、移築など大規模な予算が必要な場合、外部資金の獲得に努めなければならないという。チルターン野外博物館の敷地内には、解体し番号が付され、移築を待っている建造物の部材を格納してある倉庫がある。ところが外部資金を獲得できなければ移築は実現しないのである。土地や建物、重要な物品等を都が所有しており、指定管理者として当財団が都から指定管理を受けて運営している江戸東京たてもの園とは設立母体や運営の仕組みが大きく異なっている。

チルターン野外博物館は、政府からの補助金を受けている訳ではないので、入館者目標の設定はない。ただ、入場料収入が少なくなれば、経営にダイレクトに響くことになり、必然的に入館者の獲得が一義となる。

屋根葺きの技術的な面は、日本の民家で葺き替え作業をしたこともあるというボランティアの男性の指揮のもとに行われている。彼によれば、小麦殻と葦を使い分け、小麦殻なら20年、葦なら70年という風に、耐久性を計算して作



チルターン野外博物館内の1595年に建てられた納屋は、建物に関する教育普及のワークショップを行う場所として利用されている。

業にあたっているという。

同館の建造物は、原則として伝統的な工法・技術・素材で修繕している。しかし、公衆トイレを移築した際は、当時の塗料を使用する計画であったにも関わらず、現行の法令上、亜鉛を含むペンキが使用できなかったため、色と塗料を忠実に再現できなかった事例もある。建物の修繕にあたっては、ビルディング・マネージャー (Building Manager) が学芸員や職員と相談して、最適な方法を決めている。

教育普及事業にも力を入れており、年間12,000人から14,000人に及ぶ小学校の遠足に対応したプログラムを実施している。鉄器時代の暮らし、昔の家での生活、クリスマスの祝い方等、6種類のテーマ別にスクールプログラムを設定している。日本の公立博物館も教育普及事業を実施しているが、大きく異なるのは、例えば、鉄器時代の生活ワークショップは£275 (≒51,425円) で1クラス30人の生徒を受け入れる60分間のワークショップであるといった具合に、有料ということにある。

英国では学習指導要領の改正があり、石器や鉄器時代の学習に重点が置かれるようになり、その影響で小学校の課外学習で野外博物館を利用する機会が大幅に増えた。例えば、鉄器時代の調理、ローマ人の侵攻と古代ブリトン人の生活、発掘体験のワークショップ等を充実させている。

日本との大きな違いは、動植物も景観として保存展示することをミッションとしていることにある。ファーム・マネージャーという職員1人が、館のファーム・ボランティアを統括し、館内の羊、鶏、牛、馬の1日2回の餌やりや、サクランボの木等の管理をしている。動植物はチルターン地方固有のものを保存し、景観展示することを目的に移植されている。

## 2 ウィールド・アンド・ダウンランド野外博物館 (Weald & Downland Open Air Museum)

ロンドン、ビクトリア駅から約2時間、イギリス南部の小都市チチェスターの郊外ウィールド・アンド・ダウンランド地方にある博物館。50エーカー (約20万㎡) という広大な敷地をもつだけでなく、約1万3千点の大工道具や古民家の部材、建具などを収蔵・保管している、まさに「建築総合博物館」と呼ぶべき施設である。子どもたちへの建築教育を重視したワークショップを頻繁に開催している点は、子どもの関心を育むことを目的とした建築教育プログラムが不足している日本にとって、大いに参考になる。

予算は2014年度の収入が£2,389,305 (4億1,812万円、£1=175円)、支出が£1,953,214 (3億4,181万円)、職員数は27人、ボランティアは450人在籍している。HLF (Heritage Lottery Fund) から£480万 (約9億円) の外部資金を獲得し、ショップ、カフェ、駐車場の整備をするゲートウェイ・プロジェクト (Gateway project) 計画が進行中で、2018年完成の予定である。このプロジェクトの助成金申請のため専門のファンドレイザーを雇う必要があったという。同プロジェクトは2011年来館者インタビューを実施し、ゲートウェイ・プロジェクトとして報告書をまとめ、ビジターセンター改修工事の外部資金獲得につながったという。

この野外博物館は1970年にウィールド (平地) とダウン (丘) というこの土地固有の地形に由来する地名をそのまま名称とし、地方特有の失われゆく建造物を保存することを目的として開館した。起伏に

富んだ地形と森が、点在する建物と相まって美しい「風景」を醸成しており、ここが博物館であることを忘れてしまうような情感に満ちた体験を与えてくれる。先のチルターン野外博物館もそうであるが、国や州全体を収集範囲としているのではなく、固有の地名を持つ特定の地方に特化して建造物を収集している。

毎年約14万人の来館者を数えるが、さらなる来館者獲得のため、フード&フォークフェスティバル、ウッドショー、ビンテージ&スチーム、クリスマスマーケット2015など、大きなイベントを年6回ほど実施している。

この野外博物館の特徴をまとめると3つある。第1には、冒頭にも言及したが、建造物を移築するだけでなく、建造物に関わる大工道具や古民家の部材、建具など約1万3千点を収蔵展示する収蔵庫を有していることである。この収蔵庫は事前に申し込みをすれば、職員の付き添いのうえ、誰でも見学することができる。収蔵資料のWeb公開はまだ行っていないが、写真撮影を地道に進め、データにリンクさせる資料整理を実施している。

第2には、歴史的建造物を移築保存するだけでなく、伝統的な技術や技能を伝えるためのワークショップ（講座）を積極的に実施している点であり、そのための広大な専用スペースを有している。失われゆく歴史的建造物そのものを移築し保存することも大事なのだが、それだけではなく、建造物を維持し適切に管理していく技術を持った人材も育成しなければ、建物を未来に伝えることは難しい。歴史的建造物の維持や保全に関心を集める教育普及活動を積極的に展開しているのである。

博物館の教会の中に設置してある石の手水は、来館者と一緒にワークショップ形式で完成させている。このように体験ワークショップを通じて、館の景観造りを来館者と一緒に作り上げていくことを出来る限り念頭におき、ワークショップ体験を実施しているという。

第3には、主に学校団体向けに伝統的な大工道具や使用方をパネルで展示した、教育普及のためのラーニング・センターを併設していることである。学校の社会科見学を想定して作られた施設であり、地域の社会教育施設として重要な役割を担っていることの表れである。

こうした教育普及事業は館の全ての機能の中核にあり、



ウィールド・アンド・ダウンランド野外博物館 収蔵展示



ウィールド・アンド・ダウンランド野外博物館 学校団体向け教育普及棟

学校団体から大学院卒の専門教育まで幅広い来館者に対応したコースを提供している。約16,000人の学校団体（海外も含む）が来館しており、70%の学校団体が館のワークショップに参加し、残りの30%は先生の引率で来館している。65人のボランティアのサポートで、2014年度は1,183回の学校向けワークショップを開催している。

専門コースのプログラムは、①歴史的建造物の保存コースとして、修復保存方法の実践と講義。£75～£520（13,464円～97,240円）。②伝統的工芸品コース。藁細工や郷土料理、垣根の作り方、鋳物製作など£10～£250（1,870円～46,750円）と、2種類のコースを開講している。

復元建造物の修復や修繕について聞いたところ、中長期的な修復・修繕計画を立てているのではなく、傷みの酷い建物から順番に修復しているという。非営利法人であるチャリティーが運営し、政府から一切運営資金をもらっていないため、修復予算がついていない。つまり、ファンドレイジングによって資金調達しなければ、大規模な修復や修繕を行えないのである。

軽微な修繕についてはチルターン野外博物館と同様、ボランティアがきわめて重要な役割を担っている。ただし、予算がないから、あるいは労働力の補完として無償のボランティアが修繕を行っている訳ではないということに留意しなければならない。博物館の設置主体や設立経緯が、公立博物館とは違うことを認識する必要がある。ウィールド・アンド・ダウンランド野外博物館は、安易に労働力としてボランティアを導入したのではなく、地元の歴史教員であったアームストロング氏が個人的に建物の移築と保存を始めたことに端を発し、地元の有志が協力して博物館を設立・運営したという歴史的な経緯がある。つまり、もともと地域に住む人々の協働で設立された野外博物館なのであり、設置主体が自治体である公立博物館とは大きく異なっているのである。

ウィールド&ダウンランドに移築された復元建造物や、建造物内部の家具の多くは、高度な技術を持つボランティアの手によって作られている。ボランティアという言葉は適切な表現ではなく、地域住民の方々と結成された協働サポーターと名付けた方が適切かも知れないが、彼のような人物に館は支えられているのである。

ボランティアが復元建造物や家具を作る際は、ウィールド・アンド・ダウンランドの学芸員や歴史家の指導のもと、実施しており、19世紀から20世紀の工芸品（artifacts）が専門の学芸員や16世紀から17世紀の社会生活史（social history）を専門にする学芸員が、地域のアーカイヴから文献を探して、家具の時代考証や使う材料等の検証も行い、ボランティアを指導している。ボランティアを指導する研修プログラム等の体制がしっかりと整っている。

建造物の復元にあたっては、館内に自生するその地域特有の木を伐採し、機械などに頼らず、当時の工法を再現して復元するという徹底ぶりであった。例えば、その復元建造物が建てられた当時、縦引きの「のこぎり」を使って、木材の皮をノミのような工具を使い、手で行っていたのであれば、近代的な機械は一切使用せず、そのとおりの方法を忠実に再現して復元するという気の遠くなるような作業を行っている。ショップや事務棟が入っているエントランスの農家や食堂を除き、近代的な工法や材料は一切使用していないそうである。ただし、歴史的調理法のワークショップを行う Winkhurst のチューダーキッチンには、電気ガスや冷蔵庫等、近代的なキッチンを復元建造物内部のバックヤードに設けるなど、

例外はある。

最後に、他機関との連携でキーポイントとなるのは、大学との共同プロジェクトの実施である。地元のレディング大学との共同リサーチプロジェクトで、助成金を獲得し、16世紀から17世紀にかけて部屋のインテリアを調べるプロジェクトを実施している。大学は社会に対してどのようなインパクトを与えているかを社会に提示することが求められるようになってきており、大学側にとっても、地元の博物館とパートナーを組んで共同プロジェクトを推進することに大きなメリットがあるという。その他、地元のサセックス、サウサンプトン、ブライトン、ケント、チチェスター大学の会合や会議、建築学会やパトレット建築大学等に場所を提供するなど、積極的な連携を図っている。大学との連携は今後の日本の野外博物館でも大いに参考になる活動といえる。

### 3 エイボンクロフト野外博物館（Avoncroft Museum）

ロンドン・ユーストン駅から約1時間50分、オーケストラで有名なイギリス第2の都市バーミンガム近郊のブロムスグローブにある野外博物館。1967年開館と約半世紀を経ており、野外博物館のなかでも、イギリスでは老舗といえる施設である。32棟の歴史的建造物が移築保存されており、江戸東京たてもの園の30棟と移築数は近く、1946年のプレハブ住宅や、コルゲート板で造られた教会など、20世紀の建物を多く移築している点も、江戸東京たてもの園と共通する特徴である。ただし、江戸東京たてもの園の約5倍、東京ドーム8個分ほどの広大な敷地を有する。

当館は、ウスターシャー州ブロムスグローブ地域の歴史的建造物の再建と保護を行っている。移築に際しては建築構造の原型をできる限り留めることを方針とし、エイボンクロフトの歴史的建造物とその環境の理解と啓蒙活動を目的に、この地方の建物に住み働いてきた市民との関係性を尊重していることが特徴である。

先に紹介したチルターンやウィールド・アンド・ダウンランドと共通するのだが、当館の運営主体はチャリティーと呼ばれる非営利団体（法人）である。2014年度の収入は£713,400（1億2,484万円、£1



エイボンクロフト野外博物館 納屋の復元方法



エイボンクロフト野外博物館 古い煉瓦（上段）と新しい煉瓦（下段）

=175円)、支出は£569,026 (9,957万円)、44人の職員に146人のボランティアで構成されている。

非常に興味深いのは、建物を修理した際、新材に置き換えた部分がはっきりわかるように古色がけなどの演出を施さない点にある。つまり、新しい建材を使った場合、それが後世に継ぎ足したものであることが明らかにわかるようにしているのである。これはエイボンクロフトだけでなく、英国の他の施設でも共通の方法であり、後世の人がその建物を見た時に、竣工当時の部材とそうでない部材が峻別できるよう配慮している。

江戸東京たてもの園でも建造物の保全・補修が今後の課題となっていくが、こうした英国の取り組みは、非常に参考になる。建物の構造上、及び安全管理上危険と判断されたものについては、現代の部材で補う際、古材との違いがわかるように、木材、煉瓦、ボルト等、現代の部材であると見た目判断できるようにしている。訪問した時、4週間前に復元したばかりの、新しい煉瓦造りの家を見学させてもらった。煉瓦をバラバラにして館内で保存していたのを、1個1個積み上げて復元していったという。ここでも、古い煉瓦と新しい煉瓦を明確に区分する試みを実践しており、P.155図のように、見た目にも明らかな違いを意識的に採用していた。

当館は1967年に開館して以来、50年以上が経過しており、大規模な修繕を適宜実施しているが、その場合、建物を専門とする正規職員1人が主に計画等を作成している。建物に問題が起きた場合は、古い建物の修繕を専門に行っている民間の会社に委託し、メンテナンスプランを作ってもらっているという。

建物の修繕・修復の判断について、理事会(トラスティ)は関与しておらず、館長と学芸員、修復会社の3者で協議して修復を実施している。第三者による運営委員会や復元建造物の保存修復検討委員会のようなものは立ち上げていないという。

戦略的な修復計画を立ててはいるが、エイボンクロフトも今まで紹介してきた野外博物館と同じように、チャリティー非営利法人が運営しており、政府からの支援(予算)は投入されていない。そのため、外部資金の調達に奔走せねばならず、資金がどれだけ集まったか、つまりファンドレイズにどれだけ成功したかによって、修復のタイミングを計っている。例えば、教会1棟の維持管理に£12,000(≒2,244,000円)かかり、税関小屋の修繕に£5,000(935,000円)必要といったように、修繕が必要な建物ごとにファンドレイジングで資金集めをしているのが現状である。

その他、エイボンクロフトに移築されている教会の維持管理(外壁の塗装等を含む)に、£12,000(≒2,200万円)、エレメンタリー・ファンデーションやアイアン・エディソン・ファンデーションから£3,500(≒60万円)を獲得しているが、維持管理の目標金額には到底及んでいない。伝統的なコテージの復元に係る室内装飾や建造物の周辺環境整備に£50,000(≒800万円)が必要といったように、運営費とは別に、個々のプロジェクトでファンドレイズしなければならず、そのために資金調達のファンドレイザーを雇わざるを得ないという。

当館のイベント事業は、設置目的に合致した幅広いもので、歴史、自然、科学、技術そして芸術を探究するプログラムを方針として掲げている。ハロウィーンナイト、篝火<sup>かがりび</sup>イベント、殺人事件イブニング、キャンドルナイト、クリスマスイベント、犬と来館の日などの趣向を凝らした約20のイベントが企画、実施されている。



エイボンクロフトもボランティアの役割は大きく、庭園、植物、建物管理のサポートだけでなく、イベントのアシスタント、風車の動体展示、その他、館の運営に係るあらゆる事柄を手がけている。風車（Wind Mill）は8人のボランティアが担当し、実際に動かすため4人が常駐している。また、メンテナンス・ボランティアが、復元建造物の木製シャッター、教会の窓枠、通用門の修復等、軽微な修復を実施している。

館の重要な柱としてコレクション（展示している建造物）を楽しく学んでもらうことが掲げられていることもあり、来館者の1/6は学校団体か社会科見学の学生だという。1960年代から教育普及に力を入れてきており、学校、大学生の団体利用は年間5,615人。体験できる教育普及プログラムを1冊の本にして配布、配信している。

エデュケーション・プログラムは約45分、1ワークショップにつき、最大30人の参加を想定している。例えば、①歴史ワークショップ、②チューダー朝時代の暮らし、③ビクトリア朝時代の暮らし、④1940年代の暮らしなどで、その他、建物と構造のワークショップでは、①煉瓦、木材、漆喰をつくる体験、②時代による暮らしの違いを体験するものなど、多様な展開をみせている。

#### 4 セント・ファガンズ国立歴史博物館（St Fagans National History Museum）

ロンドンのパディントン駅から西へ電車で約2時間30分。ウェールズ地方にある国立博物館7施設のうちの1つで、野外博物館部門がセント・ファガンズである。プレマス伯爵からセント・ファガンズ城と土地がウェールズ政府に寄付されたことがきっかけとなり、国立の野外博物館として開館した。現在はウェールズ地方各地から移築された40棟を超える歴史的建造物を保存、公開している。セント・ファガンズ国立歴史博物館は、先に紹介したチルターン、ウィールド&ダウ



セント・ファガンズ国立歴史博物館  
エントランス部分に位置するプレマス伯爵から寄贈された城

ンランド、エイボンクロフトと比べると建造物の収集範囲がウェールズ地方全土と、比較的広い。

セント・ファガンズはウェールズの州都カーディフの郊外にあるイギリス最大の野外博物館で、1948年開館という長い歴史を誇っている。敷地の全面積はなんと100エーカー（約40万㎡）というきわめて広大なもので、その1/3をファガンズ家の邸宅・庭園が占めている。この「ファガンズ城」だけでも相当な見ごたえがあるが、野外にはさらに、農家をはじめパン屋、粉ひき所、鍛冶屋、教会、20世紀の店舗など多種多様な建物が移築されている。各時代における「ウェールズ人の生活」を再現することが徹底されており、家具や民具の忠実な再現に加え、伝統的な技術を用いた実演が実にリアルな印象を与え

る。このような建物内部の再現の緻密さは、通常の博物館とは一線を画すものであり、建築史学、民俗学、考古学など各分野の研究の賜だ。2005年からリニューアルのための調査を開始し、2007年に戦略的10か年計画を策定したのだが、来館者は古代から現代までのウェールズ国家の発展とそこで生活する人々の「物語」を体験することを望んでいることがわかり、それを実践する場となることを目指している。

同館は、今回訪問した野外博物館の中で最も古い設立になる。国立の野外博物館で知名度があるとはいえ、英国人の間でも大英博物館やテート・モダン、ヴィクトリア&アルバート美術館といった館に比べると、まだその存在を知られていない。これは今回訪問したいずれの英国野外博物館にも共通しているのだが、知名度の向上には苦勞しているようである。それは、野外博物館という性格上、広大な土地が必要となるため郊外に設置をせねばならず、都市部の博物館に比べ、アクセスの面で不利という地理的な要因が考えられる。

予算は国立8施設合計で£29,657,000 (≒55億4千万円)。収入は国立8施設の合計で£29,441,000 (≒55億円)。そのうちウェールズ政府からの補助金 (grant in aid) は£23,585,000 (≒44億1千万円) にのぼる。その他2012年度は、HLF (Heritage Lottery Fund) から£11,500,000 (≒21億5千万円) の助成金を獲得している。HLFからの助成金はプロジェクト全体で£25,500,000 (約47億円) という大規模なもの。このプロジェクトは、ビジターセンター改修や宿泊可能な復元建造物製作に充当し、2018年完成予定と伺った。外部資金の獲得以外で、コレクション管理費の中の修復費用で国立8施設の合計となるが、ウェールズ政府からの修復費用に該当する修復費用は£416,000 (≒7,800万円) とさほど多くない。セント・ファガンズは2011年4月にそれまで有料だった入場料を無料にしたところ、訪れる来館者数が前年度比で、約2倍に跳ね上がっている。しかし、その分入場料収入がなくなり、政府の負担は増えている。

またセント・ファガンズは、先の3つの英国のチャリティーが運営する独立系野外博物館のように、ボランティアが運営を支えるということはない。クリスマスの飾り付け等、補佐的な仕事をやってもらっているが、各建物の監視員は有給の職員が担っており、ボランティア活動は博物館での仕事を通じて、社会復帰できるような更生プログラムの一環として実施している。

館の重要な収蔵 (移築) の決定は、歴史建造物や考古学・歴史学、農村史の担当学芸員や室内装飾の担当学芸員の提案により、国立博物館の館長が決定している。日本で言えば文化庁や自治体が指定する有形文化財 (建造物) にあたるリステッドと呼ばれる保存地域の建造物を移築する場合、博物館を管轄する局とは別の局の許可が必要となるので注意が必要だという。移築の方針は開館当初、農村生活の保存に主眼が置かれていたが、現在は都心部の建造物を中心に選定が行われている。

収蔵建造物を収集する際の学芸員の役割は、建造物に加えて当時の生活環境、つまり生活史 (Living History) も同時に収集することにある。生活史は公文書にも散見されるが非常に残り難く、生活者のオーラル・ヒストリーとしての証言を1958年頃から積極的にアーカイブ化している。この点は江戸東京たてももの園においても、生活者の生の声を集積し、利用できる資料としてアーカイブ化していく作業が必要であると痛感した。

建造物以外にも建造物や生活に係る画像コレクションを所蔵しており、建造物の展示ディスプレイに

合った画像を選定するのも学芸員の仕事である。例えば、新しい建造物を復元した場合、本来は展示物全てオリジナルで展示できればよいのだが、オリジナルとレプリカをどの程度の割合で展示するのか、常に学芸員の間でも議論的となるという。

さらに、考古学的な復元建造物も視野に入れているのが近年の傾向である。というのも、英国の学習指導要領が改正され、石器時代の遺物や学習に重点が置かれることになり、野外博物館もその流れ

で、考古学的な建造物復元に重点を移してきているという社会的な要請が背景にある。特に先史時代の復元建造物となると一から作ることになり、再現住居となるが、あくまでもこれらは教育的ツールとしての建造物と割り切っているという。その際、考古学を専門とする学芸員が時代考証や指導を行い、研究成果を反映させ復元を進めている。

建物の修復と修繕については、歴史建造物部門（Historical Buiding Unit）という修繕担当部署に12人職員が配属されており、かなり充実している。屋根の葺き替え以外はこの部署で修繕できるそうだ。修復部門（Consevator Unit）と呼ばれる部署の職員が建物の状態を確認し学芸員に報告を上げ、どの建物を修繕（修復）するかは最終的に学芸員の判断に委ねられる。

地域コミュニティーの教会の移築を決定した際、解体作業中に中世カトリック教会の壁画が出てきたため、どの時代を想定した教会に戻すか議論になり、教会を博物館に寄贈してくれた地域コミュニティー、大学の教員、学芸員の3者で議論を重ね、寄贈者である地域コミュニティー了解のもと、中世の時代の壁画があった時代に戻すことに決定した。

祭壇や壁画等はヘンリー8世以降、ピューリタン式に改装されており、移築対象の教会には中世カトリックの壁画はほとんど残っていなかったため、その時代に戻すには非常に困難を伴った。そこで、英国国内でも数少ない中世カトリック教会の事例について、外部の専門家の調査研究成果を反映させて復元することとなり、専門家と修復絵画職人の共同作業で、壁画を復元したという。しかし、こうした復元の中でも例外は、教会の石畳である。冬季は特に監視員の底冷えが酷いということを想定して、この部分に床暖房を導入していた。

セント・ファガンズは学芸員だけではなく、修復や修繕の専門部署と職員が適切に組織され、各建物の監視員も有給スタッフが配置されるなど、建物を維持管理する組織体制がしっかりしているという印象を受けた。



セント・ファガンズ国立歴史博物館

12世紀から16世紀に建てられ2007年に移築された教会内部

## おわりに

今回調査対象にした英国の野外博物館ではチルターン、ウィールド・アンド・ダウンランド、エイボンクロフトの3館がチャリティー（Charity）と呼ばれる非営利法人が運営している組織で、政府の支援を受けていない、つまり税金が運営費として投入されていない組織である。セント・ファガンズだけはウェールズの国立博物館で税金が投入されている博物館組織であった。

チャリティーに代表される非営利法人が運営を担う野外博物館は、地域住民の有志が設立段階から関わり、継続的に館を支えているが、正職員の数や運営費から見て、極めて厳しい運営状況にある。したがって、ファンドレイザーという専門職を雇い、ファンドレイジングを行い、外部資金の調達に奔走しなければ新しく移築復元や修繕が出来ない状況であることがわかった。また、チルターンのトレーニーに代表されるように、運営を担う若い職員は外部資金調達により雇用されている。いわば有期雇用の職員で、資金が尽きればその雇用が維持出来ず、ボランティアのコーディネートや学校団体の受け入れに大きな支障を来してしまうのは火を見るより明らかである。運営の主眼が、資金集めに向かわざるを得ないことがチャリティーの課題であり宿命といえる。

ここで再度、注意しなければならないのは、正規雇用のスタッフの不足や資金難といった運営上の理由からボランティアが後から導入されたのではないということである。ボランティアが建物の軽微な修繕や茅葺屋根の葺き替えを行うという、日本では到底考えられないところまで館の運営にコミットしているが、それは地域の有志が設立の段階から協働して館を作り上げてきた歴史があり、地域コミュニティが支える文化が根付いているからである。

一方、国立のセント・ファガンズ博物館では、各建物の監視員は有給のスタッフが担っており、修繕を担当する部署や人数も充実し、学芸員も歴史に限らず室内装飾や考古学などの専門職が配置され、建造物や生活史の調査研究・保存に必要な人材が確保されている。国立の博物館とチャリティーによる独立系博物館を一概に比較できないが、国立のセント・ファガンズの人材、予算、組織の充実振りは圧巻であった。

ウィールド・アンド・ダウンランドのように、伝統的な建造物を維持するための技術の伝承に重点を置き、教育普及ワークショップを開催し、技術の継承と建築への啓蒙活動を館が担う体制作りは、今後日本の野外博物館でも見習うべき点である。歴史的建造物を中長期的な視点で維持管理できる人材を育成する機能は、日本の社会教育施設のどこかでも担わなければならない。江戸東京たてもの園がそのセンター的な役割を担うことが理想であるが、人員、体制、予算の確保など課題は多い。

自治体により設置された江戸東京たてもの園が目指すべき使命は、今後の時代の変化や社会的な要請によって変わるかもしれないが、移築された歴史的建造物を維持管理し、更なる復元・保存を進め、野外博物館として持続的な発展を遂げることである。貴重な文化遺産を継承するために、修繕や修復を担う専門家や人材の育成、その技術の継承が喫緊の課題である。中長期的な修繕計画の策定と、それに見合った予算の積算、修繕を担える専門的人材の育成が必要という結論になるのだが、「言うは易く行うは難し」である。今後も継続的な野外博物館調査や国際的な連携の中でその最善の手段を模索していきたい。